平成20年度丹後古代の里資料館コーナー展示1

「郷土史の黎明~明治時代の丹後地域~」

2008年4月16日(水)~7月6日(日)

はじめに

丹後地域では、函石浜遺跡が明治時代に発見されていました。この遺跡の発見と資料採集は、久美浜の稲葉市郎右衛門・宅蔵兄弟と織田幾二郎が中心となって行い、当時の東京人類学会に報告されました。特に織田は、自らが郵便局長であった久美浜郵便局舎に「織田考古館」を明治36年に開館して、全国的に見ても先駆的な博物館活動を始めました。

また稲葉市郎右衛門と織田幾二郎は、明治31(1898) 年に東京人類学会に入会しています。これは、稲葉市郎右衛門が国会議員であった点と関係しているようであり、入会直後に同学会の佐藤伝蔵が丹後へやってきます。佐藤来丹を契機として、丹後地域

1. 稲葉兄弟~市郎右衛門英裕と宅蔵~

稲葉家は、糀屋の屋号をもつ江戸時代から続く 久美浜の富豪であり市郎右衛門を襲名していました。

稲葉家住宅は、明治18年に着工し、明治23年に 完成したものです。稲葉家住宅は、壮大な和風建築 でありながら、寝室には洋風の造作を取り入れて おり、当時としては先駆的な様相をも持っていま した。現在「豪商稲葉本家」として公開されており、 住宅・長屋門・北宝蔵・南宝蔵が国登録文化財(建造 物)に登録されています。 の郷土史研究は本格的に始まったと言っても過言ではありません。

丹後古代の里資料館では、平成18年度春期企画 展示として「函石浜遺跡とその発見者たち」を開催 し、織田家文書や東京人類学会雑誌などの資料を もとに、函石浜遺跡の発見の経緯と織田考古館の 開館から閉館までの動きを見ていきました。その後、 発見に関わった稲葉家に残された文書(稲葉家文書) の調査が終了し、この文書群の中にも関係する資 料が含まれることがわかってきました。今回のコ ーナー展示では、その一端を紹介します。

※文中人名の敬称は略させていただいています。

稲葉市郎右衛門(12代)英裕(弘化3~大正4年 【1846~1915】)は、府会議員・熊野郡長・久美浜町 長を歴任し、明治28年には国会議員になります。 大正2年12月には、幕末~明治維新頃の久美浜の 様子を記した『過渡の久美浜』を記しています。

稲葉宅蔵(東園: 嘉永2~大正7年【1849~1918】) は、英裕の弟です。宅蔵は、明治初期の区戸長を歴 任し、大正元~5年には久美浜町長となっています。 明治44年には、『漁煙欧雨集』を刊行しています。

兄弟ともに、詩歌・俳句・絵画を嗜み、文化人とし ても特筆すべき人物でした。





稲葉宅蔵(左)と 稲葉市郎衛門英裕(右) 【稲葉家写真資料】

2. 織田幾二郎

織田家は、若狭屋の家号を持つ江戸時代から続く久美浜の富豪であり、九左衛門を襲名していました。稲葉家とは、江戸時代後期より縁戚関係にありました。

江戸時代末から明治時代はじめの九左衛門信光は、明治5年の久美浜郵便取扱所設置に伴い取扱人となりました。『熊野郡誌』では、「夙く殖産に注目する処あり、特に蚕室を建築して伝習所を開き、製糸に就ても座繰製糸の伝習所を開く等、率先尽力する処多かりし」ことから明治36年に金毘羅山公園に顕彰碑が建てられています。

織田幾二郎(安政2~昭和14年【1855~1939】)は、明治8年6月に父の後を受けて久美浜郵便局長となりました(明治44年5月まで)。家は、稲葉家とは道を挟んで斜め向かい(現在の土居駐車場)に位置していました。建築に関心を寄せていたようであり、明治35年の久美浜郵便局舎建築にあたっては、洋風のモダンな建築を取り入れています。稲葉市郎右衛門と織田幾二郎は、明治31(1898)年に東京人類学会に入会しています。



織田幾二郎(左から二人目) とその家族 【織田家写真資料】

3. 織田考古館の開館

久美浜郵便局長であった織田幾二郎は、古物蒐集家でもあり、建築にも関心を持っていました。同じ久美浜の稲葉市郎右衛門英裕(12代)とともに東京人類学会入会後には、歴史系資料の収集に力を注いだようであり、函石浜遺跡をはじめとする丹後地域・熊野郡内の遺跡からの出土資料を中心に全国の資料を収集します。後に中郡長や与謝郡長となる山本三省や、長明寺の住職であった青木義融などは、稲葉・織田とともに古物収集に力を入れていたようです。

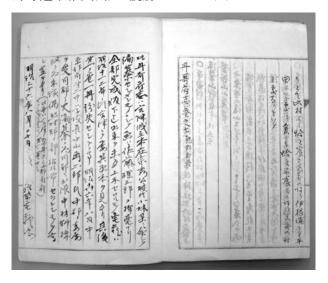
織田は、明治35(1902)年に久美浜郵便局舎を私

費で新築しました。久美浜において洋風建築は、稲葉本家の寝室に先行的に取り入れられていましたが、外観は和風建築でした。洋風のモダンな雰囲気の久美浜郵便局舎は、当時の町並みの中でひときわ目立った存在であったと想像されます。織田は、郵便局舎を新築した直後に、これまでに収集した資料を展示するスペースを2階に設けたようです。織田は、明治36(1903)年3月に「自家別荘に陳列所を設け」たことを、1年後の37年4月の『東京人類学会雑誌』第217号に報告しています。

丹後地域で初めての収集・展示施設「織田考古館」 は、このようにして開館しました。

4. 中山再次郎の来訪

中山再次郎(慶応3~昭和38年【1867~1963】) は、京都府立第二中学校(現在の京都府立鳥羽高等 学校)の校長です。中山は、明治26年に東京帝国大 学文学部国史科を卒業後、明治33年に京都府立第 二中学校長となっています。中山は、関西のスキー 普及に努めた先駆者であり、大正4年には第一回 全国中等学校優勝野球大会(現在の全国高等学校 野球選手権大会)で優勝しています。



5. 大野延太郎(雲外)の来訪

と「織田考古館」の名称

大野延太郎(雲外)(文久3~昭和13年【1863~1938】)は、東京帝国大学理科大学人類学教室に図工として採用され、明治35年に助手となっています。精緻な図を数多く残している点が学史上評価されており、丹後地域においては、神明山古墳出土の滑石製模造品の図化・報告(「丹後発見の蝋石製諸品」『東京人類学会雑誌』第176号)を行ったことで知られています。

大野は、明治40年4月14日に織田考古館を訪れています。このことは、稲葉宅蔵の日記「東園日誌」(稲葉家文書A28-004)に記されているほか、函石浜遺跡採集資料(京都大学綜合博物館所蔵)の付箋からわかります。あわせて自著の『先史考古図譜』を織田考古館に贈呈しています。

大野は、帰京後に東京人類学会例会にて「丹後地方旅行談」を発表しているほか、函石浜遺跡出土資料を図化し「埴瓮土器の名称と其遺跡に就て」という論文を執筆しています(『東京人類学会雑誌』第254号・255号)。なお「埴瓮土器」の名称は、現在の

中山は、教え子の羽田亨(後に京都帝国大学総長となる)の父親で当時中郡長であった羽田信明の委嘱を受け、中郡誌の編纂を始めます。編纂に伴って明治36年8月3日~18日まで郡誌編纂資料採訪に丹後地域を訪れます。その経緯は、大正3年に刊行された『丹後国中郡誌稿』巻末に所収されている「郡誌編纂材料採訪日誌」に詳しく記されています。

この中で中山は、8月16日に「久美浜に至り稲葉氏方にて丹後一覧集一部、他書一部、並に地図一折を得又織田幾次郎氏方の古墳物陳列館を覧る我善王寺其他の古墳発掘品整然として陳列しあり又丹後大地図一枚あり」と記載しており、稲葉家と織田考古館を訪れています。稲葉家には、中山が携えていた京都府庁本『丹哥府志』を借り受けて稲葉宅蔵が写した写本(実際に写したのは、婿養子の稲葉岸之助)が残されています。

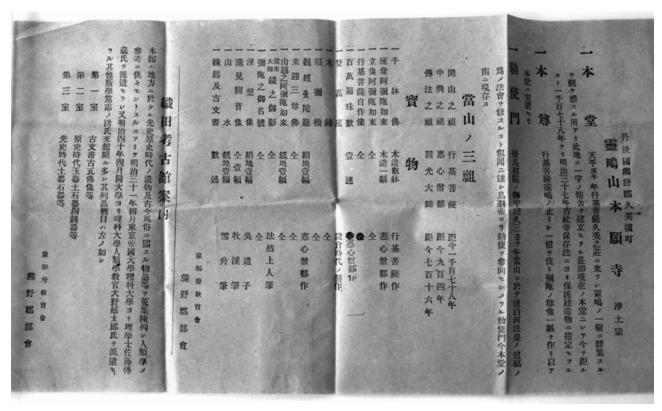
『丹哥府志』写本識語(稲葉家文書A 6-011-3)

弥生土器について大野が使用した名称であり、当 時の学会で論争を呼んでいたものです。

大野延太郎(雲外)来訪直前に織田幾二郎へ手紙を出した和田千吉は、宛名に「考古館」と記しています(織田家文書)。これが「考古館」という名称の初出であり、それ以前は、「陳列所」「集古館」と記されています。

大野来訪以後に京都府教育会熊野郡部会によって作成された「織田考古館案内」や「観覧券」には「考古館」という名称が使われています。大野来訪を契機として、東京人類学会とのつながりの中で「考古館」を正式名称としたと思われます(なお「集古館」という名称は、その後も使われています)。

「霊鴫山本願寺案内/織田考古館案内」(稲葉家文書A23-044)は、明治37年に特別保護建造物の指定を受けた本堂を有する本願寺と織田考古館の両方の案内が同時に京都府教育会熊野郡部会により作成されたことがわかる資料です。明治40年代の久美浜には、現在でいう文化財めぐりのコースがすでにあったことがうかがえる資料といえます。



「霊鴫山本願寺案内/織田考古館案内」(稲葉家文書A23-044)

6. 坪井正五郎の来訪

織田考古館には、学校関係者をはじめ、柳田国男などの学者が来訪していました。その中で特筆すべきは、東京人類学会の会長であった坪井正五郎が明治43年8月12日に来館していることです。坪井は、帰京後に、函石浜遺跡出土の管玉・勾玉を図化・報告した「管玉曲玉の未成品」(『東京人類学会雑誌』第294号)という論文を執筆しています。

坪井来訪の模様は、入院中の稲葉市郎右衛門英裕宛に稲葉宅蔵が書いた絵手紙に「博士来」と記されています(稲葉家文書A93-001)。

坪井正五郎来訪の様子を描いた稲葉宅蔵の絵手紙 (稲葉家文書A93-001)



7. 稲葉・織田と関係のあった人々

①桜井勉

桜井勉は、隣国但馬出石出身で、内務省地理局長・神社局長等を歴任し、兵庫県第九区選出で衆議院議員となっています。また明治29~31年には、山梨県知事や台湾新竹県知事となっており、この間は稲葉宅蔵の婿養子となる上坂(稲葉)岸之助の上司でした。おそらくこれ以前より稲葉・織田家との関係があったものと推定されます。

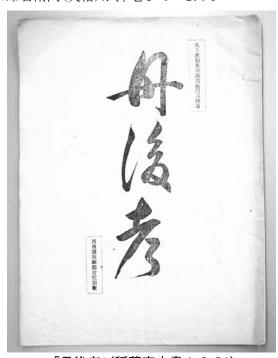
久美浜では、明治36年に織田幾二郎の父九左衛門信光の功績を記して金毘羅山公園に建てられた 顕彰碑の碑文を撰文しています。

稲葉家文書には、大正元年11月29日に、稲葉宅蔵に久美浜代官の姓名・任免年月日を問い合わせた葉書(稲葉家文書B48-132・134)が残されているほか、「児山桜井勉翁米寿賀集」(稲葉家文書B104-040)には、米寿祝賀会の参加者に稲葉岸之助の名が見えます。

②関 清謙

関清謙は、宮津藩家老関左門の子です。経歴は不明ですが、明治40年代に丹後国歴史編纂期成同盟会や丹後国歴史研究会を創立して、機関誌「丹後考」を発刊していました。

稲葉家文書には、「丹後考」が11冊残されています。 そのうち「丹後国与謝郡古代田数」の表紙は、稲葉 市郎右衛門(英裕)が揮毫しています。



「丹後考」(稲葉家文書A6-21)

③堀内 清

堀内清は、兵庫県立豊岡中学校の教諭で、後に教頭を務めます。但馬地域においては、森尾古墳や気比銅鐸(いずれも豊岡市)の発見に関わっています。 気比銅鐸の発見については、大正2年1月に『歴史地理』に報文を寄せています。 堀内は、織田・稲葉ともに関係があったようです。明治37年には、豊岡中学校の生徒を連れて織田考古館を訪れています。 堀内は、大正2年6月に中ノ谷貝塚(豊岡市)発見の報を稲葉宅蔵に伝えています。これを受けて宅蔵は、6月26日に現地を訪れたことを日記に書き残しています(稲葉家文書A28-010)。 堀内は、7月1日付書簡に同封して現地の写真を送っています。



中ノ谷貝塚(稲葉家写真資料、右から二人目が堀内)

④瀧宜睦(たきぎぼく)

瀧宜睦(明治6~昭和20【1873~1945】)は、久 美浜町稲葉家の出身で、宗雲寺にて修行の後、神戸 市福厳寺の住職となります。瀧は、書画・詩歌にも 秀でており、蘭岳の雅号をもっていました。神戸を 中心に活動した神戸史談会の有力な会員の一人で す。神戸史談会は、後に『兵庫史談』を発刊するほか、 絵葉書を発行しています。また戦時中に瀧は、久美 浜へ疎開していたようです。

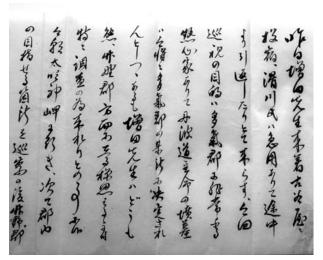
織田幾二郎(松里)宛に出された(明治43年か) 11月12日付の礼状から、瀧は織田考古館見学と函 石浜遺跡の踏査を行っていることがわかります。

瀧は、その後も稲葉・織田家とのつながりがありました。特に稲葉宅蔵と婿養子の岸之助は関係が深く、岸之助には『福厳寺記』等の刊行図書を送付しています。歴史関係のみならず、書画・詩歌の関係も深かったようです。瀧の存在は、後に関係する宮内省御用掛の増田于信や滑川友一との接点となった可能性が高いようです。

8. 増田于信(ますだうしん)の来丹

宮内省御用掛の増田于信は、文久 2 (1862)年に水戸藩士雨宮于勝の4子として生まれ、東京大学文学部付属和漢古典講習科を卒業しています。明治17年に本居豊頴の養子となるが、早い段階に離籍するようです。明治17年に元老院書記生となり、後に宮内省へ移ります。明治40年には宮内省御用掛に任ぜられ大正15年までその任にありました。

明治43年6月29日~7月2日には、当時宮内省の京都出張所にいた増田が丹後地域を訪れています。6月30日付稲葉市郎右衛門宛稲葉景介書簡によれば、増田来丹の目的は、多気(紀)郡に熱心家がいて丹波道主命の墳墓が同郡の某所(雲部車塚古墳と思われる)に決定されようとしていたが、熊・竹野郡方面に墳墓があるように思われ調査に来たということです(稲葉家文書C50-136)。



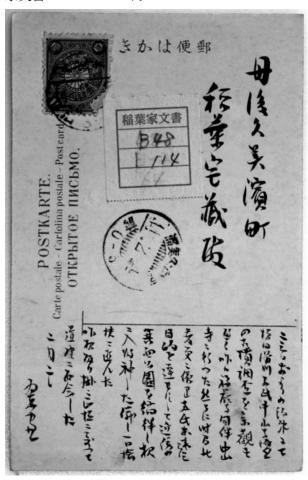
増田来丹を伝える稲葉景介書簡(稲葉家文書C50-136)

稲葉宅蔵は、日記にこの間の事情を詳しく記しています(稲葉家文書A28-007)。

増田は、6月29日夕方に久美浜へ入り、翌日は 稲葉宅蔵・織田・神谷神社宮司佐治正章の案内で、 大明神古墳群・織田考古館・陵神社(坂井)・川上麻 須郎女屋敷跡(須田)・芦原神社境内古墳をまわり、 網野銚子山古墳・竹野郡役所へ至っています。7月 1日は、稲葉・竹野郡教育会長坪倉重和・網野尋常 高等小学校長柴田勝治・竹野郡書記小倉瀧蔵の案 内で網野銚子山古墳・兎毛古墳・離湖古墳・離山古 墳から神明山古墳・竹野尋常小学校周辺の遺跡・小 学校所蔵資料を見て、峰山に向かっています。途中、 神宮寺の麻呂子親王墓を遠望したことが記されて います。翌2日は、稲葉・中郡書記堀江秋三郎の案 内で久次真名井社等に行き、稲葉は別れて久美浜へ帰り、増田は与謝郡へ向かったようです。

なお増田来丹の一件は、竹野郡役所文書「明治四十三年 古墳調査一件」(京都府庁文書)に、郡書記小倉瀧蔵(後に熊野郡長)の復命書として詳細に報告されています。

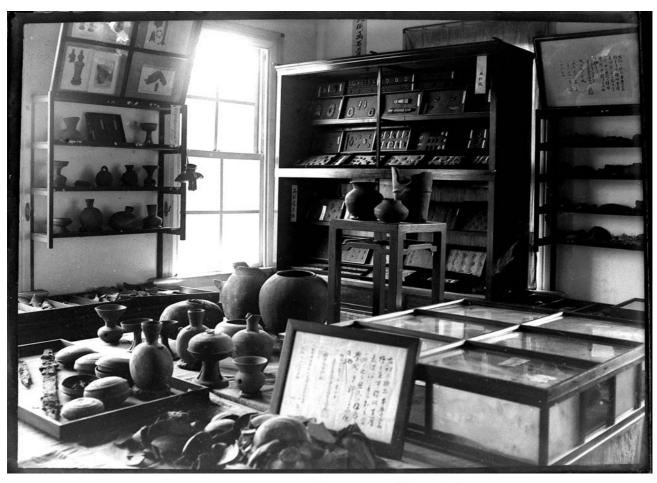
増田来丹前後には、瀧より増田・滑川両氏の陵墓調査の動向を記した葉書が稲葉宅蔵宛に送られています。また稲葉市郎右衛門英裕は、瀧とともに中山寺(兵庫県宝塚市)を訪れ、増田・滑川の古墳調査を参観しようとしていたことがわかります(稲葉家文書B48-113・114)。



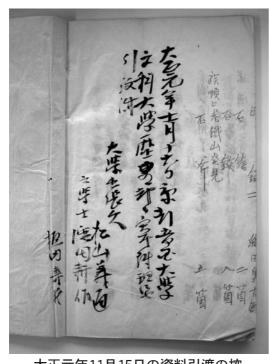
増田・滑川の古墳調査の参観に来たが 両氏が到着しなかったことを伝える 稲葉市郎右衛門英裕書簡(稲葉家文書 B 48-114)

織田考古館所蔵資料の寄贈先について瀧は、増田・ 滑川に相談している向きがあり、明治43年の増田 来丹前後の動向が注目されます。

また増田の来歴については、まだ不明な点が多いですが、大正時代に少なくとも2度は丹後地域を訪れています。丹後地域の郷土史研究に関して増田が与えた影響は、今後の課題といえます。



織田考古館内部写真 【織田家写真資料】



大正元年11月15日の資料引渡の控 (『織田考古館目録』巻末、織田家文書)





9. 「織田考古館目録」の作成

織田幾二郎は、明治44(1911)年5月に久美浜郵便局長を退職し、婿養子の俊三があとを継ぎます。これを契機に織田は、所蔵資料を研究機関へ寄贈することを考え始めたようです。織田は、各方面へ寄贈先の心当たりを照会していたようです。明治45(1912)年5月20日付の瀧から織田への書簡には、瀧が織田からの依頼と目録送付を受けて、宮内省御用掛の増田于信に事情を話し、心当たりを尋ねたことが記されています。そのためこの頃に織田は、目録を作成したことがわかります。

目録掲載資料は膨大であり、京都帝国大学からの資料寄贈御礼状には1485点とあります。採集範囲は、地元の丹後地域や但馬・丹波・山城といった隣接地域のみならず、奈良・滋賀・岐阜・長野・岡山・福岡・大分・熊本・宮崎・東京・神奈川・千葉・青森・宮城・福島・北海道といった国内のほぼ全域、一部には朝鮮半島・台湾・中国(清)・アメリカといった海外の資料も含まれています。

「織田考古館案内」の「第一室 古文書古瓦仏像等」には図書・制札類・酒株・鑑札・雑・通貨・古桝・古瓦・経塚、「第二室 原史時代玉器土石器銅銕器等」には古墳物、「第三室 先史時代土器石器等」には貝塚・貝塚物を展示していたと推定されます。



織田考古館目録(織田家文書)

10. 「織田考古館」の閉館

織田考古館は、大正元(1912)年11月16日に、京都帝国大学(現在の京都大学)へ所蔵資料を寄贈して閉館します。

当日は、稲葉景介(12代稲葉市郎右衛門の長男) が織田考古館内部の写真撮影を行っており、ガラス乾板が2枚残っています。考古館内部を撮影し た唯一の写真として貴重なものです。

京都帝国大学からの資料受取には、松山義通・浜田耕作・植田寿蔵が来館しました。3氏の来館については、『織田考古館目録』末尾の受取控があり、来館が確認できます。この時に織田は、京都帝国大学総長あてに「資料寄贈願」をあわせて提出したようです。

資料受取に来館した3名のうち浜田耕作(明治14~昭和13【1881~1938】)は、日本近代考古学の理論構築者として知られる学者です。当時は、京都帝国大学文科大学講師でしたが、資料受取り直後に助教授となり、イギリスに留学します。

織田は、資料寄贈後の12月1日付で閉館あいさつを出しています。残された送付先控には、東京人類学会の関係者や織田考古館への来館者の名前があり、多方面の人々とのつながりが浮かび上がります。

※増田于信については、鈴木淳「増田于信のこと」 (『国学院大学日本文化研究所報』第115号1983 年)および瀬田勝哉「『伏見古図の呪縛』」 (『武蔵大学人文学会論集』第31巻3号 2000年) の成果を引用させていただいています。

平成20年度丹後古代の里資料館コーナー展示1

「郷土史の黎明~明治時代の丹後地域~」展示解説シート

編集・発行 京丹後市立丹後古代の里資料館 2008年4月発行 〒627-0228 京丹後市丹後町宮108